近代医学と人形
ドレスデン国際衛生博覧会（1911）に出展された日本の生人形（いきにんぎょう）と節句人形

石　原　あえか

1. 本論のきっかけ　1911年ドレスデン国際衛生博覧会・日本館公式展示目録扉絵

常葉なる松の並木に寄せる白波、その背後には雄大な富士山。おそらく紅白であろう布装飾が施された高い天井の展示空間。パビリオン入場者が最初に目にする大きなガラスケースに並ぶのは、向かって左から、黒紋付き姿の男性、隣に声をかける仕草の上品な和装の奥様、それに応じるように立つ振袖の若いお嬢さんと手をつなぐその弟らしき袴姿の少年。20世紀初頭のハレの日、たとえば元旦の日本人一家の姿を髣髴させる。1911年にドイツ・ドレスデンで開催された国際衛生博覧会（Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden、以下、略称IHAを用いる）の全文ドイツ語による『日本館展示目録 *Verzeichnis der von der Kaiserlich Japan. Regierung ausgestellten Gegenstände*』のうちグループD「衣装・身だしなみ　Kleidung・Körperpflege」[1]の扉絵には、印象的な写真が使われている（図1）。今から100年以上前、日本政府の威信をかけ、三越百貨店で誂えた着物をまとい、海を渡ってドイツに到着したこの人形は、その後、どんな運命をたどっ

図1　「1911年IHA日本館入口に並ぶ4体の晴れ着姿の生人形」
DHMDより許可を得て掲載・転載不可

たのだろうか。

第二次世界大戦末期の1945年、ドレスデンは大空襲によって壊滅的打撃を受け、聖母教会（フラウエン・キルヒェ）や宮殿も瓦礫の山と化した。1930年に開館したドイツ衛生博物館（Deutsches Hygiene-Museum Dresden、以下、略称DHMDを用いる）も80％倒壊した。てっきりこれらの人形も戦火の犠牲となり、灰になったと思い込んでいた筆者が、2013年夏に科研費研究課題のプレ調査でDHMDを訪れた際、博物館教育部門担当者が「ちょうど州立民族博物館から借りた等身大の日本製人形2体を展示しているけれど、ご覧になる？」と声をかけてきた。その2体こそ、見紛うことなき、1911年の日本館公式展示目録に載っていた父と息子だった。驚く筆者に、担当者は問いかけた。「他の人形の行方をご存じない？母・娘は残っていないのかしら？」と――。確かに2体現存するのなら、他の人形が存在しても不思議はない。多少の回り道をした後、2014年6月、ザクセン州立ドレスデン民族博物館所蔵コレクション専属服飾専門修復師Müller-Radloff氏と連絡がつき、「DHMDには2体貸し出したが、倉庫に戻っている。まもなく他の施設に貸していた生人形も戻るので、全6体が久々に揃う」との回答を得た。

小さな白黒冊子の扉絵からでは全く判別がつかない、出品された人形の大きさはもとより、どんな衣装をまとっていたのか、どんな表情をしているのか、またいつからDHMDではなく民族博物館の管轄になったのかなど、さまざまな観点から一度検証の必要があると考え、2014年8月にドレスデン新市街はずれにある民族博物館収蔵保管庫まで赴き、実物調査を行った。

別途、同時にDHMD附属図書館資料から、別ジャンル、すなわち節句人形のコレクションの存在が判明し、こちらも民族博物館の倉庫に現存することを確認できた。いずれも日本に里帰りの予定がない[2]が、1911年のIHAに出品されたという点で、近代日本の医学史的また文化史的にも興味深い標本である。よって次節より、出品時の歴史背景等も再構築しつつ、当該標本の調査報告としたい。

2. 生人形と1911年のドレスデン国際衛生博覧会

(1) 国内外に現存する生人形をめぐる研究状況

《生人形》という語を最初に見た人は、どう読むのか戸惑うはずだ。江戸庶民文化の見立て細工の1ジャンルとして誕生したこの見世物は、最初は《生人形細工》と呼ばれていたし、また《活偶人》や《活人形》といった当て字もあった。民衆娯楽の一環として、「等身大」かつ「材料を明かさず」（実際は紙糊が主体）、恐ろしいほどリアルに作られた人形による、今にも動き出しそうな瞬間を活写した静止場面の展示。江戸～明治期に日本を訪れ、この精巧にして迫真の肉体表現を目の当たりにした欧米人たちは、一目でその虜となり、こぞって生人形を注文・購入し、本国に持ち帰り、博物館等の収集コレクションに加えていった。

本論で扱うドレスデン以外のドイツにおける生人形コレクションの1例を挙げるなら、ブレーメンの「海外博物館Überseemuseum」には初代館長シャウインスラント（Hugo Schauinsland 1857-1937）が日本から送らせた生人形が複数現存する[3]。彼は日本での美術品収集買付旅行中、上野の美術館でマネキン代わりに民族衣装を着せて展示されていた生人形や浅草公園の見世物小屋で生人形による本来の活写場面を見学し、その写実性と技術の高さに注目・熱狂し、自らの博物館の展示用に積極的に生人形を注文・購入している。主に仲介したのは横浜・山の手154番に

あったドイツ系ベルクマン商会で、近年海外博物館内で業務記録も発見され、1911-1927年まで（ただし第一次世界大戦中を除く）、主にこの商会を通じて、日本とブレーメンの間に継続的な生人形の発注があったことが確認されている。

日本画や彫刻といったいわゆる高尚な芸術とは全く異なるレベルの大衆芸術、何といっても見世物興行の作品だから、各作者の技量水準には大きな差があるが、中には海外コレクター垂涎の卓越した技を誇る名匠――たとえば松本喜三郎（1825-1891）や安本亀八（初代：1826-1900）――も存在した。しかし三次元の生人形を使った見世物興行は、国内では昭和初期に姿を消し、かわりに二次元平面が動く「活動写真」すなわち映画に移行していった。

日本では過去の絶滅した大衆文化となった一方で、生人形は早くは長崎・出島に滞在したオランダ人商館長ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff 1779-1853）や同商館付医師として国籍を偽って赴任したドイツ人日本研究家シーボルト（Philipp Franz von Siebold 1796-1866）らが熱心に収集し――これらはオランダ・ライデン国立民族博物館に現存する――、ドイツはもとより、イタリア、イギリス、スイス、オーストリア、アメリカの名だたる民族博物館・美術館で、――ただし南嶌の表現を借りれば、始めから所蔵庫に入る定めで、決して大衆の目に晒されることのない《死人形》[4]として――大切に保管されてきた。卑俗な大衆芸術の産物であったがゆえに、どんなにその表現技術が高くとも、日本の美術史界は長らく生人形を研究対象として取り上げることに躊躇いがあった。日本国内で《生人形》の本格的な研究が始まったのは、ごく最近のことである。その直接の突破口、もしくは引き金となったのが、熊本市現代美術館で開催された『生人形と松本喜三郎　反近代の逆襲』展（2004年）、そしてその第二弾『生人形と江戸の欲望　反近代の逆襲II』展（2006年）であった。

(2) 生人形名人　松本喜三郎と初代・安本亀八

本論との関連で特筆すべきは、熊本現代美術館で開催された初回『生人形と松本喜三郎』展図録の複数箇所に指摘がある通り、生人形師・松本が近代医学と深い関わりを持つことだ。熊本に生まれた松本は、少年期は絵師になるための修業をし、成長してからは地元・熊本迎町の地蔵祭恒例の立体的な「造り物（つくりもん）」でライバルの初代・安本亀八と腕を競った。30歳にして大阪難波新地で初めて生人形の見世物興行「異国人物人形」を行い、大好評を博す。これに自信を得て江戸に進出、明治になって間もない1871年2月から浅草で開催された生人形見世物「西国三十三観世音霊験記」は爆発的人気により、異例の4年にわたるロングランとなった。現存する『谷汲観音』はこの時作成され、会心の出来ゆえ、もう1体作ったものだという。と同時に松本はその卓越した技術を見込まれ、翌1872年、大学東校（現・東京大学医学部）から人体解剖模型製作を依頼され、1年以上かけて紙塑人形を制作した。この模型はのちに熊本医科大学（現・熊本大学医学部）に移管されたが、残念ながら戦災で焼失した[5]。また翌1873年ウィーンで開催された万国博覧会に「骨格連環」を出品、後年は義足も制作するなど、医学分野に引き続き技術的に貢献していたことが判明している。

他方、安本亀八については、その名を銘として、初代の父親から二代目の長男、三代目の三男が継承していく。初代はすでに述べたように松本と同郷・熊本の生まれで一歳年下だが、こちらは仏師の家に生まれたので、生人形とは別に仏像や特定個人の肖像など彫塑作品が現存する。青

年期から松本と「造り物」で腕を競うライバルだったが、こちらは明治に入ってから生人形に本格的に取り組み、松本同様、まず大阪難波新地で1870年に「東海道五十三次道中人形」の見世物興行でその実力を世間に知らしめてから上京、浅草で松本とともに生人形見世物の双璧として活躍した。二代目・安本亀八（1857-1899）は初代の長男だが、IHAあるいはDHMDとの関係でいえば、初代も二代目も1911年の開催時には鬼籍に入っている。

IHA開催時に安本亀八として活動していたのは、初代の三男にあたる三代目（1867-1946）だった[6]。彼の経歴がIHAとの関係で興味深いのは、大正の頃から「世田谷三軒茶屋に大工房を構え、各国の万国博覧会に出品された等身大の風俗人形や、上流階級の贈呈品用人形、デパートのマネキン人形を多く制作」[7]した事実である。もっとも彼がタイアップしたので有名なのは、銀座松屋デパート（大正14年5月開店）であり、生人形をマネキンとして使った「今様風俗人形陳列会」で大評判をとった。ただし彼と本論で扱うIHAに出展された生人形や「三越呉服店」との関わりは残念ながら、今のところ不明である。

(3) 第一回ドレスデン国際衛生博覧会への日本参加

第一回ドレスデン国際衛生博覧会は、プロイセンの首都ベルリンではなく[8]、ザクセンの古都ドレスデンで、開催された。この衛生博覧会を企画・実行した立役者は、「オドール王」ことドレスデンの企業家リングナー（Karl August Lingner 1861-1916）である。彼は1892年頃から特に衛生事業分野に参入し、口腔内の清浄を保つマウスウォッシュ――今もドイツ語圏の薬局・ドラッグストアでお馴染みの――「オドールOdol」で巨万の富をなした。大富豪となった彼は、市民の衛生意識の啓発をライフワークとし、IHA終了後には衛生博物館を建設することを早くから見据えていた。もっともIHAの直接の契機は、1903年にドレスデンで行われた移動展覧会『国民病とその克服 *Volkskrankheiten und ihre Bekämpfung*』に始まる。この興行成績が予想をはるかに超えて好調だった（のべ一万人動員）ので、さらなる規模拡大を目論んだわけだ。しかし肝心の興行資金調達問題で難航し、当初1908/09あたりの開催の予定が、1911年に延期となった。

ところで、このIHAに日本が初参加している。1884年のロンドンで行われたIHAについては、日本は参加を表明したにもかかわらず、展示品が香港での積み替え時に火災で焼失し、やむなく参加を見送った過去があった。今回も参加を快諾したようだが、その経緯についての日本語参考文献は乏しく、詳細が把握できなかった。そのため2014年8月、ドレスデンにあるザクセン州立中央文書館で、1911年のIHA関係の内務省および外務省管轄の該当文書ファイル[9]に直接あたって事実関係を確認し、以下のような歴史背景を再構築することができた。

ようやく資金調達のめどがつき、1909年8月にIHA名誉総裁らが決まると、「国際」と銘打つからには海外諸国の招待が必要になった。1909年12月20日付でドレスデンからリングナーら実行首脳部がベルリンの内務省に出した公文書簡には、「衛生学の先進国としてぜひ招待したい国」として、ベルギー、ブラジル、デンマーク、フランス、イギリス、イタリアに続いて「日本Japan」の文字が登場する。その後にはオランダ、ノルウェー、オーストリア＝ハンガリー二重帝国、ロシア、スウェーデン、スイス、アメリカ合衆国が挙げられている[10]。

当時ドイツは、パリ、ロンドン、ローマ、東京、サンクトペテルブルク、マドリッド、コンスタンティノープル、ワシントンの9都市に大使館を持っていたが、コッホの良きライバルである

パスツールを擁するフランスが早々と参加を表明する一方、1910年秋の時点でイギリスおよびオーストリアが不参加と回答してきた。イギリスはともかく、王室姻戚関係も友好的だったはずのオーストリア＝ハンガリーの参加拒否はザクセンにとって衝撃的だったらしく、公文書簡には「再度理由を尋ねて、何としても参加させよ」という指示が飛んでいる。そうかと思えば、イタリアは参加を表明したはいいが、1911年1月半ばになってもパビリオンの建設が進まず、本当に間に合うのか、とだいぶ裏で関係者の気を揉ませている。

そんな中で日本はかなり早くから――前回不参加の雪辱を果たしたかったのだろう――積極的な反応を示している。複数の公文書簡を参照しつつ経緯を再構築すると、1909年のクリスマス直前に、世界各地のドイツ大使館に派遣先国へのIHA参加要請が決まり、翌年1月以降、指令を受けた各大使館がミッション遂行に動き出す。1910年3月2日付で東京のドイツ大使館が、「他にどの国が参加を表明しているのか、その他詳細を早く知らせてくれ」と頼む書簡があり、続く3月17日には同じく東京ドイツ大使館から、IHA概要説明に必要な印刷物が届いたという報告とともに、「日本はどうやら参加するらしい、しかも日本館建設のため国民議会は20,000円［42,000マルク相当］の支出を検討中、ただし公式決定には時間がかかりそうだ」という内部情報を伝えている。ちなみに同年の東京大学年間授業料は50円であった［週間朝日編『値段史年表』参照］。

といっても日本の対応はかなり早い。こちらドイツの内務省・外務省の両方に東京ドイツ大使館から報告が届いているが、4月5日の『国民新聞』の記事を参事官がドイツ語訳したものを4月6日付で送っている。そのドイツ語訳によると、「日本がこうした国際博覧会に招待され、日本のパビリオンの建設を依頼されるのは、特別の名誉であり、また政治的意味でも学問的にも、世界から脚光を浴びるまたとない機会である」とし、「日本の医学界は特段の注意を払ってこれに与するであろう」と記されている。

その後、1910年9月10日付の各国参加状況を詳しく記した報告書には、ロシア、フランスに次ぐ3番目に日本の状況が示されており、「露仏同様1200平米のパビリオン建設を予定」とあり、「その陣頭指揮は、著名な衛生学者にして細菌学者の北里［柴三郎］が掌握する」と書かれている。実は北里には別途、ベルリンの恩師でIHA名誉理事を務めることになったコッホから、早くも1910年3月14日付書簡が送られ、リングナーの兄エーミール（1857-1925）がIHA参加依頼の件で来日することが予告されていた[11]。もちろん伝染病研究所長を務める北里自身が現地に赴いて、長期間パビリオン「日本館」の建設を含めた準備をするわけにはいかない。リングナーの兄エーミールの使節団としての公式訪問を受け、伝染病研究所からは宮島幹之助（1872-1944）[12]が実行委員として派遣され、内務省役人待遇で準備期間から会期中および撤去作業まで含む10か月間をドレスデンで過ごすことになった。本稿で言及する日本製の人形は、すべて彼が窓口となってドイツで受け取り、責任をもって展示し、会期終了後はしかるべき相手に売却・贈与した――宮島は北里宛書簡で簡単な終了報告をしているが、ドイツ側に資料はない――ものである。

3. 三越百貨店誂えの和装生人形　ドレスデンに現存する6体について

1911年ドレスデンにおけるIHAは、北里率いる日本医学界のプライドがかかっていた。12セ

クションのうち、グループD「衣装・身だしなみ　Kleidung・Körperpflege」の公式ガイドを担当したのは、東京大学医学部教授（衛生学講座）・横手千代之助（1871-1941）であった。ここで彼は当時の日本のファッションについて、医学的視点から詳しい解説――丁寧なドイツ語で、和装に興味のあるドイツ語圏の人々にはこれが一番の説明になると思う――を行っている。横手は衛生学者で、1901-04年までドイツ留学の経験がある。医学者の目で、簡潔かつ客観的に1910年頃の日本の風俗を伝える文章は、衛生学だけでなく、民俗学をはじめ人文科学一般に興味深い内容なので、以下、全文訳ではなく、エッセンスだけを示す。

まず横手は1910年前後の日本人の服装について、洋装は増えているが、まだ和服が多いことを指摘する。男性の特に公務員・銀行員・商社マンは洋装が増え、また中等部以上の学生服も普及してきたものの、女性の洋装は大都市でのみ見受けられる程度だという（S.17）。そして洋服が体の線にぴったり沿うよう裁断・縫製されているのに対して、和服は身体を柔らかく包むため、保温機能が高い、と横手は分析・論理づける。そしてコルセット同様、帯は身体を締め付け、肝疾患の原因となると指摘する。そこから延々10ページ近く、着物の素材（綿・絹・ウール）とその保温性・保湿吸収性あるいは通気性について、室温や湿度を変えた場合の洋装との厳格な実験比較（表データ付）が続く。ここで衣類の素材に注目するわけだが、男女ともに絹・綿が主体で、夏は麻が加わる。また中流階級は、外出時は絹・絹混だが、自宅での普段着は綿とすることを記している。その中流階級の和装描写だが、男性であるなら夏は麻の襦袢［地袢］に帷子または薄絹をまとい、外出時は羽織・袴着用が必須、女性は薄絹の長い襦袢を下に着用する。下層階級は綿の木綿の単衣を年間通して着ている。

対して上層階級は、冬になるとフランネル・綿・絹の襦袢の上に、数枚さらに羽二重（上質の絹の）下着を重ね、さらに綿入れの最上の絹でできた着物を重ね、袴をつける。寒さが厳しい時には、羽二重の下着の間にさらに綿入れの胴着をつける。重い絹の保温性を考えると、地球温暖化する前の20世紀初めの東京がどんなに寒かったかが、想像できる。さらに上流階級の場合、色合いや柄は四季に則り、羽織には3箇所あるいは5箇所に家紋をつける。帯はいずれも絹で、これが一番高価で大事な服飾であり、女性の場合はこれがメインの装飾品の役割を果たす。続いて重要なのが羽織である。また女性は帽子を用いず、冬の寒風を避けるには頭巾を被る、と横手は記している。

こうした一連の説明の後、18ページ目から、出展生人形についての具体的な描写が始まる。おそらく当時のドイツ人観客は、この説明を読みながら、この4体を眺めたはずだ。筆者にとっても今回の保管庫調査時に、この日本館公式目録の解説は大いに役立った。以下は、テクストと比較した現状の調査報告である。なお4体のうち、少年を除く3体が纏う着物には、いずれも五つ紋が入り、このことから日本の上流階級を表現していることが読み取れる。

まずは髪型の説明から、「信玄袋を持っている女性」――目録扉絵では確かに右手に袋物を下げているが、現在、信玄袋は失われている――すなわち夫人［母親］は、既婚者の印の丸髷を結っている。ヨーロッパ式の束髪は珍しく、娘［ドイツ語では姉Schwesterの語が使われている］の人形が結っているのは高島田である。

続けて足まわりは、父親のみ草履で、母親・娘・少年（Knabe）は畳表付の駒下駄。さらに「夏以外は屋内でも足袋を履いている」という説明通り、ドレスデンの4体の生人形はいずれも

きちんと白い足袋を履いている。足元を確認するためにそれぞれ裾を捲ってみると、脛の部分は確かに「張りぼて」で、少しずつトーンの違う肌色の和紙が貼られていた。

続けて各生人形の着ているものの説明に入るが、父親の衣装は、紫――実際は青に見える――が基調の袷の着物、その下は白の羽二重の下着と襦袢の間には絹の胴着をまとう。軽いダマストが入った保温性のある漆黒の羽二重の羽織には正装の「上り藤」の五つ紋、博多産丸織の角帯を締め、絹製の袴をはく。母親あるいは奥様の正装は、「羽織は青灰色の絹縮緬」とある。事実、生人形は裾に白菊の入った灰色が混じった落ち着いた紫系の縮緬の袷［訪問着］で、こちらも「上り藤」の五つ紋。ただし袖裏・八掛は赤で、長襦袢にも色柄の入った菊模様が施され、白い半襟も菊の刺繍で統一している。帯揚げ・腰帯も絹製で、帯は糸錦織。娘は肩上げをした振袖姿なので、十三参り前後の年頃のつもりだろうか。上半身は置き場所が悪かったのか、かなり色褪せているが、下の色はまだ青紫が鮮やかに残る。藤や紅葉など四季に関係なく着られる花柄の正装姿の彼女も同じ家紋、すなわち「上り藤」の五つ紋なので、こちら生人形に衣装を着つけた［あるいは注文した］人物は、この4体を当初から家族として意識していたことが推測できる。これに薄いオレンジの下着と鮮やかな紅絹の長襦袢。これに光沢のある絹帯を締める。こちらお端折りの腰紐が緩んでしまったのだろう、だいぶ皺が目立ち、また裾も落ちて引きずっている。息子は筒袖だが、光沢のある格子柄の羽二重織の着物で、姉と同様、肩上げしているために可愛らしい印象だ。下は短い袖のない襦袢を重ねている。博多献上の白地の帯を結んだ上に、これまた光沢のある博多織の茶と青の縦縞の入った袴をつけている。なお、娘と息子のふたりは展示時は手をつないでいたが、現在は腕の部分が外れてしまい、別途保管されている。

なお、横手の記述で興味深いのは、和服の相場が書いてあることだ。通常相場は冬用が30-150マルク、夏用が20-100マルク、女性の着物はもっと高額であるという。ドレスデン市立博物館で1900年前半の平均的労働者の月収を確認すると、およそ60-90マルクの間を推移していたらしいので、高価な装束という印象をもたれたはずだ。なお横手は、生人形4体はいずれも冬の装い（Winteranzuge）であることを告げ、「その特徴にしたがって、いずれも東京の三越が誂えた装束を身に着けている Nach Anzahl und Eigenschaften sind die von der Firma Mitsukoshi zu Tokio dafür gelieferten einzelnen Kleidungsstücke」（S.19）

図2 「父親の生人形・頭部」
ザクセン州立ドレスデン民族博物館の許可を得て著者撮影・転載不可

と記されている。

横手の場合、着ているものが問題なので、《生人形》の表情は問題にされていないが、どの頭髪も植毛されており、父親の顔には中年の男性らしい皺まで正確に刻まれているなど――そこはかとなく森鷗外の肖像写真を連想させる――いずれも特定のモデルがいるのではないかと想像されるほど、具体性に富む（図2）。

ザクセン州立民族博物館は、この4体とは別にさらに2体の《生人形》を所蔵しているが、こちら前述の4体と比べると、表情はのっぺりと現在のマネキンに近い。それもそのはず、展示会場が上記の4体とは異なり、この2体は、学校保健・衛生関係のブースで、「制服」の展示のために誂えられたものだ。こちら男の子は、肩上げした黒絣の着物に、白と黒の縦縞の袴、黒い靴下――だいぶ虫に食われている――に黒皮の編み上げ靴を履き、制帽を被る。着物の下は、立襟の白い木綿のシャツ――ブラウスに近い――を着ている。女の子は大きな赤いリボンを頭頂に結び、うなじのあたりでもう一度、別の花柄のリボンで髪をまとめている。ピンクの半襟に肩上げした黒絣の着物、その上に華やかな扇を散らした青地のコート、黒皮の編み上げ靴といういでたちなので、下は袴かと思いきや、意外にも穿いていたのは――オレンジの半幅帯を締めているが――青いぽってりしたロングスカートだった。

なお、本田代志子は、この制服を着用した2体については、「この日本パビリオンとは別に世界学校制服部門で展示されたと推定される」[13]と書いているが、これについてはDHMDに保管されている1911年当時の写真資料調査により、日本館内の『児童保健・学校衛生 Kinderfürsorge und Schulhygiene』部門の展示であることが判明した。2体の隣のケース内に展示されているのは、次節で扱う端午の節句飾り一式で、内容的にも一致する。

4. 1911年のドレスデン衛生博覧会で展示された節句人形

(1) 衛生博覧会に出展された節句人形とその経緯

熊本の生人形展図録に木下直之は、「祭りが終われば人形は姿を消す。桃の節句の雛人形も、端午の節句の武者人形も同じだろう。見世物もあくまでも仮設の興行であり、生人形を後世に残すということは考慮されない」[14]と書いた。これまで見世物興行用消耗品として芸術的価値を低く評価されてきた《生人形》を扱ってきたが、本節ではIHAという「祝祭」に、暦とは無関係に飾られ、祝祭の後は100年以上、異国ドレスデンの倉庫で眠っている日本の節句人形の来歴と現状について報告する。

ドレスデンの生人形が着用している衣装が三越製であることはすでに述べた。実はこの三越、IHAでもうひとつ重要な役割を果たしている。DHMD附属図書館の資料調査で、1911年の日本館公式展示ガイド以外に、三越の名前がタイトルに入った資料が2点見つかった。ひとつは総ページ数21すべてドイツ語による小冊子で、『子供用品説明書』とあり、もうひとつはその補助資料で、比較的丈夫なB4の紙に両面印刷し、それを4つ折りした写真入り図譜『子供用品リスト』とのタイトルで、いずれも「三越呉服店 Mitsukoshi Gofukuten」製、出品責任は、直訳するなら「子供用品促進協会 Verein zur Förderung von Gebrauchsgegenständen für Kinder」とある。『説明書』冒頭にある協会の設立の歴史と趣旨によれば、こちら子供用品の品質向上と普及に努める団体で、1909年4月に発足、日本橋の三越呉服店本館に事務局が設置された[15]。といっても百貨店の

マーケティング戦略を練るようなものではなく、子供が使う玩具をはじめ、絵本など遊びの対象全般を学問的実用的見地から改良を加えることを目標とする学術団体であったようだ。事実、総勢21名の会員の顔ぶれは錚々たるものである。

順不同で主要メンバーを挙げていくと、まず日本の児童文学研究者にして『桃太郎』や『花咲爺さん』などに再び命を吹き込んだ日本のお伽噺作家・巌谷小波こと季雄（1870-1933）。巌谷は当時、早稲田大学講師と三越相談役を兼務していた。続いて洋画家で東京美術学校教授の黒田清輝（1866-1924）子爵。小児科医で日本の学校衛生の創始者とも言われる三浦通良（1866-1925）教授。東京帝国大学教授で、当時一高校長も兼任していた新渡戸稲造（1862-1933）。同じく東京帝国大学教授で機械工学、特に造船学を専門とする斯波忠三郎（1872-1934）男爵。さらに同大学教授で日本の「人類学の祖」と呼ばれる坪井正五郎（1863-1913）。児童心理学者で日本女子大学講師を勤める高島平三郎（1865-1946）――と、こんな調子である。会員は毎週水曜日に三越本館の協会事務局に集うことになっていた。

この子供用品促進協会の会員にIHAへの展示協力を打診したのが、北里柴三郎の高弟のひとりで、寄生虫研究などで知られる宮島幹之助だった。先に言及したように、彼は伝染病研究所から日本館展示責任者として準備のためにドレスデンに派遣されており、宮島がドイツ側の到着荷物の事務手続きおよび実際の展示を引き受けた。子供用品促進協会内に医学関係に従事する会員が複数いることからも自然ななりゆきと考えてよい。宮島の要請を受けた協会は、直ちに68点の純粋な日本の伝統的玩具を厳選し、これに協会創案の9種類の新種の玩具を加え、さらに斯波発案によるという竹で編んだ乳母車を1台添えてドレスデンに送った。

このうち協会創案の玩具は、目録写真ではその仕組みがよく判らないが、ドイツ語の本文説明から、おおよその遊び方がわかるようになっている。たとえば冒頭に挙げられた「飛んで来い」は、坪井が1906年にオーストラリアのブーメランを模して作った6歳くらいの子供向け玩具だという。「亀と兎」も坪井が1910年に考案した、お伽噺をモティーフとしたサイコロによるテーブルゲーム。「数え扇」は巌谷の考案で、裏面には童謡がかかれ、黄色に塗られた小さな扇の中心には日の丸が描かれているという。お茶の時間に4歳くらいの少女たちが扇を交換しながら後ろに書かれた歌を歌いあう――という設定を読むだけで、幼い歌声が響く穏やかな時間を予感させる。「源平毬」も1910年に巌谷が考案した赤ん坊から老人まで屋内・外ともに楽しめるというふれこみで、白12、赤12、緑1の計25の毬を転がして遊ぶもの。1910年の考案が多いことから、IHA参加決定後、会員が知恵を絞り、新たな玩具作りに真剣に取り組んだのだろう。

他方、メインの展示品である「純日本製の人気ある玩具」と題された68点の玩具は、現代の視点では子供が実際に手にして遊んでいる姿はあまり見かけず、むしろ博物館等で「郷土玩具」と呼ばれるものが多い。素朴な日常的玩具のドイツ語訳は難しかっただろうし、少々無理がある部分もあるが――現在の『和独辞典』に掲載がないものも多い――、それでも何とか訳し、ローマ字の日本語読みを併記している。たとえば犬張子は「Symbolischer Hund［象徴的な犬］. Inuhariko」、竹トンボは「Bambus-Libelle（Fliegend.）［竹で作ったトンボ（飛ぶ／飛ばせる）］. Tonbo」という具合だ。以下は参考までにドイツ語訳のみを添えるが、凧（Drachen）、独楽（Kreisel）、お面（Masken）、竹馬（Stelzen）、双六（Würfelspiel）、水中花（Blumenspiel. Im Wasser sich entfaltend［＝水中で開く造花］）、線香花火（Kinder-Feuerwerk）、羽子板と羽根

(Federballspiel)、鳥笛（Vogelstimmen-Flöten aus Bambus)、馬車（Holzpferd auf Rollen)、千代紙（Kleidermuster zum Ausschneiden fuer Mädchen)、太鼓（Trommel)、姉様［人形］(Anziehpuppen mit Papierkleidern)、箱庭道具（Gärtchen im Kasten)、でんでん太鼓（Klapper in den Händen zu drehen mit Flöte)、お手玉（Jonglier-Säckchen）などなど、確かに計 68 点が出品されている。さらに目録写真を見ると、他にも絹布に子供が屋外・屋内で遊んでいる姿を描いた絵も展示されたらしい。

しかし子供用品促進協会が送った荷物の目玉展示品と言えば、桃と端午、つまり少女と少年のための節句飾りだったのではないか。いずれも三越による誂えで、これまたそれぞれ現在のドイツ人に読ませても喜ぶような丁寧なドイツ語の説明が添えられている。たとえば雛祭りは、3 月 3 日に特化した女の子のためのお祭りとして、以下のような文章にまとめられている。

> 雛人形は、華奢で繊細に作られており、この期間限定で飾られる。日本中世の宮中を模しており、美しい衣装をまとい、可愛らしいが、非常に細かいところまで精巧に作りこまれている。現代ではなく、平安時代の装束で、最上段には男女の対、その下にふたりの［原文ママ、おそらく 3 名の誤記］女官が控え、宮廷楽師、また女官が続き、京都御所と同様に、桜と橘の樹木が対で置かれる。女の子が生まれると、この人形飾りを誂えることになっていて、親戚等がお祝いにお道具などを送る。結婚後も嫁ぎ先に持参して、毎年雛人形を飾り、女友達を招いて祝う。この種の人形遊びについては、すでに 9 世紀から記述が認められるが、3 月 3 日に定着したのは 15 世紀以降と思われる[16]。

目録に載っている写真は 4 段飾りで、最上段に女雛と男雛、その左右に橘と桜の作り物、そして雪洞が飾られている。一段下が三人官女とその両脇に右大臣・左大臣、三段目は五人囃子と衣桁などの調度品、四段目は三段目に続けて御神酒や御膳、牛車などが飾られている。

続いて、男の子のお祭り、端午の節句についてのドイツ語解説が続く。全文は次の通り。

> 端午の節句　5 月 5 日の男の子のためのお祭り
> 5 月 5 日は男の子のためのお祭りで、勇敢さと将来が盤石であることを祈願する。桃の節句との大きな違いは、大人になると飾らなくなることである。歴史的に有名な名将や物語の勇敢な主人公を模した人形に鎧・幟・鯉幟・風車などを添えて飾る。14 世紀にはこの日、少年同士で合戦遊びをしたというが、徐々に兜や幟が装飾に加わり、18 世紀に現在の形が定着した[17]。

目録掲載写真には、［鷹狩用の］鷹の剥製や鞍つきの馬、弓を引く武将や「日本一」という幟を掲げた武将集団（桃太郎の場面か？)、鯉の背に跨る稚児など、なかなか勇ましいデコレーションである。刀や弓はもちろん、その最上段には鯉幟や風車とともにふつうの幟が立っているが、それに丸に越の入ったマークが入っているのも、その品質保証のためだろうか。

もっともこれらの節句人形は、この目録通りには飾られなかった。DHMD 所蔵の写真には、前節で紹介した制服姿の少年・少女が入ったガラスケースの隣に、同様に大型ガラスケースの違

図3「制服姿の生人形2体と五月人形飾り（左側・部分）」
DHMDの許可により掲載・転用不可

い棚に、目録にある節句飾りが整然と展開されているが、いかにも欧州の博物館らしい展示で、節句の段飾りとはだいぶ雰囲気が変わってしまっている（図3）。なお、節句人形のうち現存が確かめられたのは、雛飾りの五人囃子のうち2楽師（1体は笙を持ち、もう1体は楽器なし）、左・右の大臣の計4体であった。端午の節句関係では、幟や甲冑は、それぞれ別カテゴリーに分散格納され、複数残っている。また子供用品促進協会の展示品と同一と思われる羽子板やでんでん太鼓といった郷土玩具の一部も、現在は、ドレスデンのザクセン州立民族博物館所蔵庫の引出に並べて収納されている。

5. 日本近代医学史研究における問題点とこれからの展望

熊本現代美術館で生人形展を主催した南嶌宏は、「生人形についての研究が、アカデミズムの研究者によってではなく、野にある研究者によってなされてきたという事実」を指摘している。実際、『名匠松本喜三郎』の著者・大木透（1887-1959）は九州日日新聞（現・熊本日日新聞）の記者であったし、また『生人形安本亀八』の著者・冨森盛一（1895-1977）は元小学校校長の郷土史家であった。大衆芸術の見世物小屋を起源とする《生人形》は、所詮、美学美術史家の研究対象としては卑俗すぎるものだった。

翻って日本の医学史研究を鑑みると、似たような現象が認められる。旧帝国大学皮膚科学講座の歴代教授とその門下生の名前などを調べるのは、さほど難しくない。しかし彼らの下で、彼らが講義や学会に用いたこの上なく精巧でリアルなムラージュ［皮膚・性病を中心とした病疾患を

直接患者から石膏取りして作った蝋製標本］を製作した技師たちの経歴、否、名前すら、現在すでに追跡は困難をきわめる。彼らは多くの場合、正規技術者ではなく、嘱託であり、皮膚科の裏方に徹していた。稀にムラージュを個人的に重用・愛好する医学部教員スタッフが存在すれば[18]、消息が何とか把握できる程度である。生人形師を実際に知って伝記を書いた大木・冨森両氏のようにはいかないが、ムラージュを教材として使った最後の皮膚科医 OB および保管場所に苦労しながらも歴史的ムラージュを維持する各大学医学部皮膚科教室の協力も得て、系譜を何とかまとめ上げたいと考えている。

他方、欧州の大学医学部・同附属病院などに勤務していた専属ムラージュ師については、その芸術的特殊技術が早くから評価され、皮膚科教授のパートナーとして記録が残っており、多くの場合、その経歴を比較的容易に知ることができる[19]。また欧州ではムラージュを貴重な医学的文化財と認識し、少数ながら国家資格を持つ専門修復師も活動している。これに対して日本国内には生人形同様、日本の皮膚科学教室に辛うじて現存する齢 100 年近いムラージュを修復できる技能をもつ人材は絶え、朽ちていくままの状態である。

同時に 20 世紀初頭の緊密な日独医学交流の歴史を再構築しようとする科学史［あるいは医学史］研究者にとって、現在の学術公用語は主に英語であるため、ドイツ語で書かれた史料、特に公文書館調査で避けることのできない髭文字（Fraktur）とそれに準じたドイツ式筆記体の解読技術を含めたアーカイブ作業が難しいことが、ドイツ側でのオリジナル資料調査を滞らせている原因のひとつになっているようだ。

なお、1911 年以来、主に工房と倉庫として機能していた DHMD［の前身］が所蔵していた日本からの生人形・節句人形・玩具は、1930 年の第二回ドレスデン IHA での待望の博物館オープンを前にした 1929 年、展示場所の不足を理由に民族博物館に売却された。売却の年代は、民族博物館倉庫にある所蔵品の各特長の文字情報と専属絵師によるイラストが添えられた情報カードに記されていたため、辛うじて確認できた。しかし DHMD と民族博物館の間での書簡や詳しい売買記録は――戦後も存在していたはず、という話もあるが――現在、行方不明になっている。なお民族博物館の展示物が奇跡的に大空襲の難を逃れたのは、第二次世界大戦中、ドレスデンから 50km ほど離れた要塞に疎開させていたことによる。

ところで 1990 年代以降、DHMD に新しいタイプの人形が展示されていることも見逃せない。2004 年、熊本での『生人形と松本喜三郎』展のために、アメリカ・スミソニアン自然史博物館から 126 年ぶりに里帰りした中年貴族男性の生人形――こちら明治のお雇い外国人のひとり、アメリカ人の北海道開拓使顧問ケプロンが松本喜三郎に注文したもの――は、通常、着物に隠れていて見えない胴部分などは手抜きだったりするのに対し、年齢相応の肉付きと肌色を再現し、さらには観客の目に触れるはずもない性器・陰毛に至るまで作りこんであった。この卑俗さ・卑猥さが、美学研究者たちの眉を顰めさせたことは、想像に難くない。だが私たちが普通に考えるデフォルメされた人形とは異なり、性器・陰毛などを正確に象った（ドイツ語を直訳すると）「解剖学的人形 anatomische Puppen」[20] が、近年、性教育教材および性犯罪被害者となった子供たちのセラピーに必要不可欠な役割を担っている。これまた医学と人形の結びつきの深さを示す一例であり、またある意味、変形した「生人形」への回帰現象のひとつと考えられるのかもしれない。

【謝辞】

本研究資料調査にご協力いただいた以下の方々および研究機関の皆様に心からお礼申し上げます（敬称略、順不同）。北里柴三郎記念室 森孝之先生、大久保美穂子様／ドイツ衛生博物館（DHMD）館長 Herrn Prof. Klaus Vogel, Frau Susanne Roeßiger, Frau Marion Schneider, および同附属図書館司書 Frau Ute Krepper／ザクセン州立中央文書館 Sächsisches Staatsarchiv in Dresden の皆様／ザクセン州立ドレスデン民族博物館 Herrn Dr. Bruno Öhrig, Frau Irene Godenschweg, Frau Christine Müller-Radloff. 最後に 2014 年 8 月からの 1 カ月余に及ぶドレスデン研究調査を可能にしたドイツ研究財団 A. v. Humboldt-Stiftung の研究支援に深く感謝します。

注

1 東京大学図書館・森鷗外文庫には、すべてのグループ冊子を綴じて製本した形のものが所蔵されている。ただし本論文執筆には DHMD 附属図書館所蔵の冊子を使用した。

2 この生人形、後述する熊本での松本喜三郎展に貸与も考えたが、保険額の高さに断念せざるを得なかったとのこと。腕が欠けたり、支えを失って自立できなかったりするものもあり、修理目的以外では今後も海外への展示貸与は難しいだろう。

3 全身像 3、頭部 63、腕部約 28、脚部 12 組。胴体に頭や腕・脚をはめ込ませる構造をとる。本田代志子、「生人形とミュージアム　ヨーロッパの生人形」、熊本市現代美術館『生人形と松本喜三郎　反近代の逆襲』展図版（2004 年、以下、本図版からの論文出展は『生人形展』と記す）、150 頁以降参照。およびブレーメン海外博物館記念図録 *schauinsland! Ansichten aus Übersee. Hugo Schauinsland zum 150. Geburtstag*. Bremen（Überseemuseum）2007 の章：*Es laufen ja wohl immer noch Chinesen genügend in Japan herum. –von „lebendigen Figuren" und „japanischen Chinesen"*, S.104-109 参照。

4 南嶌宏、「反近代の逆襲　生人形の生と死」、『生人形展』、92 頁以降参照。特に 93 頁には「なぜなら、欧米の博物館は「死」の集積、つまり、いかに多くの「死」を所有するかによって国力を示す、国家そのもののメタファーとして存在したからである」。

5 同上、南嶌宏、「反近代の逆襲」、93 頁。

6 本稿執筆にあたっては、荒俣宏の『衛生博覧会を求めて』からも多くの示唆を受けたが、安本亀八に関する記述部分は、生人形研究が飛躍的に進んだ現在、史実と相違がある部分が多く、たとえばこの部分でもすでに故人の「二代目」を「三代目」と取り違えて推測を行っている。

7 冨澤治子、「日本の生人形総論」、『生人形展』、114-115 頁参照。

8 ただし「衛生」の語こそ冠しないが、衛生救難をテーマにした「ドイツ博覧会」はこれより四半世紀以上前の 1883 年 5 月、ベルリンで開催されていた。

9 閲覧調査したのはザクセン州中央文書館の主に Findbuch Nr.10736 Ministerium des Innern Sektion 16. Gesundheitswesen（1793）1831-1945（1949）を参考に、IHA 関係が綴じ込まれている一連の公文書ファイル［以下、ファイル番号のみ記す］：MdI（内務省関係）1572, 1573, 5177, 15391, 15392, 19223 および MdAA（外務省関係）の 8922, 8923 ほか。

10 ザクセン州立中央文書館所蔵・外務省ファイル 8922 番、Blatt 84 より。

11 北里柴三郎記念室所蔵資料番号 K01047.

12 寄生虫研究者で、マラリア、ツツガムシ病、日本住血吸虫、ワイル氏病等の研究に従事した。のちに国際連盟のアヘン中央委員会委員としても活躍したが、公務中の自動車事故により急逝した。このドレスデン滞在中、宮島が展示作業進捗報告を書き送った北里宛の書簡や絵葉書は北里記念室に現存する。なお、1911 年の IHA 事務総長 F. A. Weber の回想録 *Die Internationale Hygiene-Ausstellung Dresden 1911 als Wegweiser und Wegbereiter späterer Arbeit*（DHMD刊行の *10 Jahre Dresdner Ausstellungsarbeit*, 1931 所収）には宮島らが現場責任者だったことが明記されている（S.203）ほか、開会バンケット席順にも彼の名前が認められる。

13 本田代志子、「生人形とミュージアム」、154 頁。

14 木下直之、「生人形の見世物と展覧会について」、『生人形展』、108 頁より引用。

15 *Beschreibung der Gegenstände ausgestellt vom Verein zur Förderung von Gebrauchsgegenständen für Kinder*. Mitsukoshi Gofukuten, Tokyo, Japan auf der IHA. Dresden 1911, S.1, Vorwort.

16 前掲書、S.17f. 日本語訳は筆者。

17 同上、S.18. 日本語訳は筆者。

18 たとえば名古屋大学専属ムラージュ師・長谷川を重用した皮膚科学教授・加納魁一郎との関係など。

19 DHMD 専属ムラージュ師も初代コルボフ（Fritz Kolbow 1873-1946）から彼の弟子リップマン（Ella Lippmann 1892-1967）を経て、ヴァルター＝ヘッカー（Elfriede Walther-Hecker 1919-）に至る系譜が明示されている。E.Walther/S.Hahn/A.Scholz: *Moulagen. Krankheitsbilder in Wachs*. DHMD（1993）S.27. また同館発行の全 10 分にも満たない VTR ではあるが、Walther-Hecker による実演ムラージュ制作ドキュメンタリーからは、日本とは多少作業工程に違いがある可能性は高いが、日本ではすでに忘れ去られてしまった基本的なムラージュ制作の流れを知ることができる。

20 Fegert, Jörg M./Mebes, Marion（Hrsg.）: *Anatomische Puppen. Hilfsmittel für Diagnostik, Begutachtung und Therapie bei sexuellem Mißbrauch*. Ruhnmark（Donna Vita）, 1993.